

多久聖廟 春季積菜

連綿と続く伝統を
今に受け継ぐ式典

古式ゆかしく

新緑の聖廟で厳かに開催

孔子とその弟子である四配（顔子・曾子・子思子・孟子）の遺徳を讃える春季積菜が4月18日、多久聖廟で厳かに執り行われました。



▲積菜に合わせ披露される龍旗（写真奥）と麒麟の像（写真右）



▶孔子と四配の像へお供え物を奉納する祭官

式典では、伶人が奏でる雅楽が流れる中で、献官の横尾市長や市議会議長、教育長、小中一貫校長など祭官が孔子様と四配の像に甘酒、餅などのお供え物を奉納しました。

また、県内外から献上された漢詩を祝者が読み上げる『読詞』では、新緑の聖廟で連綿と続けられてきた式典を情景豊かに表現した漢詩が披露されました。



▲祭官から孔子像に献上する甘酒を注がれる献官の横尾市長（写真左奥）



▲孔子と四配の像に奉納されるお供え物



▶県内外から寄せられた漢詩を読み上げる祝者



▲式典後、孔子の里職員から説明を受けながら一般公開された廟内を見学する来場者



お呈茶（多久市茶道会主催）

積菜に合わせ、東原庁舎で、多久市茶道会（会長：古賀宗美）によるお呈茶（有料）も開催され、聖廟や、学問にちなんだ巻物をあしらった『お干菓子』と抹茶が提供されました。

福岡県北九州市から来場された松永重子さんと宮島洋子さんは「学問の里として市民一体となって受け継がれている素晴らしい式典。秋にもぜひ来場したいです」と話されました。

▶茶道会会員の金子宗純さんよりお干菓子を受け取る来場者のみなさん



◀お呈茶で提供された抹茶とお干菓子



▶「積菜の舞」を演舞した三瀬さん（写真左）と大崎さん（写真右）



◀西浜校6年生による躍動感あふれる「腰鼓」

式典後、聖廟境内では西浜校生徒の『積菜の舞』、西浜校1〜5年生と、多久町老人クラブによる『参列生徒の唱歌』。仰高門前では、鮮やかな衣装の西浜校6年生が『腰鼓』を披露しました。趙勇さんが奏でる揚琴では、『花』、『夏の思い出』などが演奏され、懐かしい音色に来場者が口ずさむ姿も見られました。

また、今回積菜の舞を演舞した西浜校8年（中学2年）の三瀬公博さんは「練習の成果を本番で発揮できました」と話し、同校8年（中学2年）の大崎彪瑚さんは「色鮮やかな衣装が魅力。多久の伝統芸能を受け継ぐ一心で頑張りました」と演舞を振り返りました。

市長コラム

温故創新

Message for citizen

市制施行六十周年を迎えて

市長 横尾俊彦

五月一日、多久市は市制施行六十周年を迎えます。昭和二十九年のこの日、一町四村が合併し、新たな市として多久市は誕生しました。

市となつてからは日本の高度経済成長時期にあたり、石炭産業を軸に活況感も増しました。

けれども昭和三十一年に財政再建団体になっていきます。行政運営が政府（自治省）管理下となり、再建計画をつくり、実行が義務付けられました。

当時の市職員によれば「鉛筆一本を新たに使うにも許可が必要だった」とのこと。それほど厳しい状況だったのです。財政再建十年計画をなんとか九年で達成。まさに懸命な努力の成果です。

昭和四十七年の炭鉱閉山で急激な人口流出に直面。過疎対策に奔走した時代もあります。

そんな苦汁の中で身につけた儉約節約姿勢はその後の困難を耐え抜く力になりました。不撓不屈のDNAは未来を拓く力になるものです。

この六十周年を新たな時代への「創始」の年にしたいと強く思います。①文教の里・多久だからこぞできる文化教育の向上。二十一世紀にふさわしい新しい教育の創造に挑みます。②市民一人ひとりの長寿健康と幸福感を高める健康ウエルネス展開へのチャレンジ。誰もが健康に過ごせる社会基盤づくりと健康意識・行動を促進。③小さくともキラリと光るまち、一人ひとりの人生も輝く創意工夫の結集で未来を拓くのです。

六十年間の歩みに貢献された全ての方々感謝しつつ、未来への開物成務を進めましょう。